

社会

単元を見通して、「見方・考え方」を働かせながら深い学びにいたる授業づくり

社会科では、資質・能力の育成を目指して、深い学びの実現に向けて授業改善を行ってきました。

深い学びの鍵となるのが「見方・考え方」です。この「見方・考え方」を習得・活用・探究という学びの過程で働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげることが重要です。ここでは、単元を見通して、「見方・考え方」を働かせながら深い学びにいたる授業づくりの取組について紹介します。



県中教研 社会科部 全県部長
魚沼市立広神中学校

校長 小森 一秀

単元のまとまりで「見方・考え方」を働かせる授業を構想する

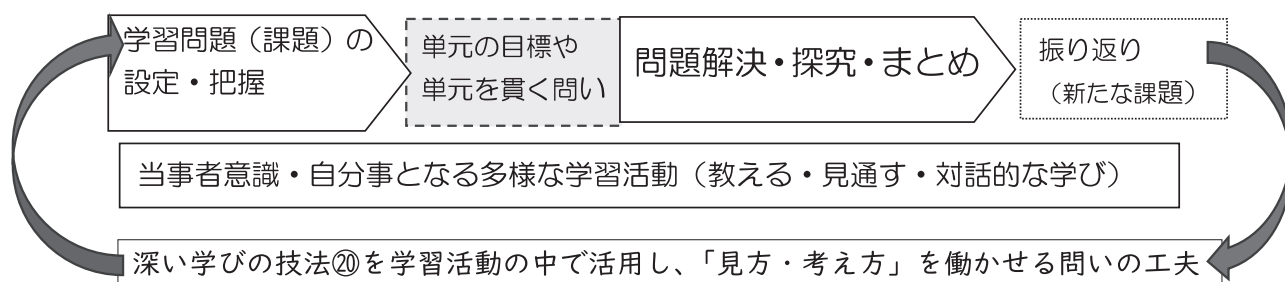
1回1回の授業で全ての学びが実現するものではなく、単元や題材などの内容や時間のまとまりの中で、学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこで設定するか、生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかを考え、実現を図っていく。その際、単元目標や単元を通した学習課題を設定し、学習課題とまとめの整合性を図りながら単元構想することがポイントになる。単元を通して「生徒は何ができるようになるか」というゴールをしっかりと見定め、そのゴールに到達するために、生徒にどのように学ばせるのか、

ねらいを明確にした学習活動を設定する必要がある。

そのため、単元のまとまりの中で、多様な学習活動を設定し、学びの技法を学習活動の中で活用することで、「見方・考え方」を働かせる授業を構想する。

また、見方・考え方の「見方」とは視点であり、「考え方」とは思考である。「見方・考え方」は、子どもが身に付けている知識・技能と思考力・判断力等をつなぐ働きがある。子どもが「見方・考え方」を働かせるためには「問い」が必要不可欠である。

単元のまとまり（授業構想）のイメージ



社会的な「見方・考え方」を支える問いの構成の工夫

次に問いの構成の工夫について述べていく。学びの深まりは、「見方・考え方」を働かせることを通して、より質の高い学びにつながる。そのために問いの構成を工夫し、問いの質を高めていく。すると生徒は当事者意識を高め、事象を自分事に引き付けて、調べたことや仲間との対話を通して、関連付けた知識を獲得していくことができる。

- ① 「いつの出来事」「どこの位置」など社会的事象を見い出すための問いにより、事実に基づく知識を獲得する。単元の初めの段階で基礎的な知識・理解を獲得するために有効である。
- ② 「なぜ」、「どのように、どのような」という問いには、社会的事象の関係や特色について多面的・多角的に考察させる問いで、考察した結果として概念的な知

識を獲得できる。グループで課題を追究する際に有効である。

- ③ 「なぜそのような判断をしたのか」「どのような地域にするべきか」という問いは、社会の在り方や自分自身のかかわり方を構想（選択・判断）するための問いであり、社会に見られる課題について構想するための問いとなる。生徒が主体的に社会に参画しようと意識を高める際に有効な問いであり、当事者意識 自分事に引き寄せるために有効な問いとなる。

このように単元を見通して、目的に応じて「問い」の構成を工夫し、「見方・考え方」を働かせて、課題を追究する過程を通して、「深い学び」の実現につなげることができる。

「見方・考え方」を働かせて深い学びにいたる各地区のポイント !!

- 構造化された問いと自らの価値判断の場面を取り入れた単元構成で深い学びにいたる授業。
- 問題意識をもって課題の追究・課題の解決を図っていく学習をデザインする授業。
- 生徒が「見方・考え方」を働かせて思考や判断することで、課題解決力を高め、社会形成に参加する態度を獲得する授業。
- 単元を通して獲得した知識を活用して多面的・多角的に考察することで、将来の住民としてどのような行動が必要か考える授業。

社会 重点方針

自ら考え自ら学び、確かな学力を育てる社会科の学習指導に努める。

- 生徒の学ぶ意欲を高めるために、主体的な学習を促す魅力ある「教材開発」や「単元構成の工夫」を行う。
- 学び合い深め合う学習を実現するために、適切な課題を設けて行う学習の充実を図り、小集団学習や話し合い活動を取り入れた「学習過程の改善」を行う。
- 資料を選択し活用して、自分の考えを記述・発表する力を育てる。

〈参考文献〉

- 中学校学習指導要領（平成29年告示）解説」文部科学省2017年
- 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説」文部科学省2017年

社会 <上越地区／柏崎市・刈羽郡中教研>

11月18日(火) 研究会開催

研究主題：当事者意識のある深い学びを実現させる授業の工夫

～他者と協働し、粘り強く最適解を

探究する課題解決を通して～

単元名：「3年：地方自治と住民の参加」

会場校：柏崎市立松浜中学校

公開：1学級

授業者：伊佐 勝

指導者：刈羽村立刈羽中学校 校長 後藤 純二 様
柏崎市教育委員会 指導主事 近藤 多計夫 様



研究推進責任者
柏崎市立第五中学校
石塚 貴希



教科・領域担当者
柏崎市立松浜中学校
伊佐 勝

こんな深い学びの姿を目指します

学習指導要領が示す「よりよい社会の実現に向けて、課題を主体的に解決しようとする態度の育成」に着目し、問題意識をもって課題の追究・解決を図っていく学習をデザインします。

単元構成を工夫しながら、現実社会の課題をどのように解決していくか、自分事として課題に向き合い、その解決に向けて考え抜く姿を目指します。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.1）

追究・解決したくなるような課題を、単元全体の学習課題として設定する。

生徒は自分とのつながりや関わりを感じ、問題意識をもって主体的に学習していきます。

ポイント2（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.5・8）

様々な意見に触れるとともに、「社会的な見方・考え方」を働かせて、議論の内容の吟味・検討を行う。

生徒は多様な意見にふれることで思考を広げていきます。さらに視点を示すことで、焦点化した学び合いができます。

ポイント3（解決の過程→「深い学びの技法」のNo.9）

学んだ知識や学び合いを生かし、思考の深化・変容を図る。

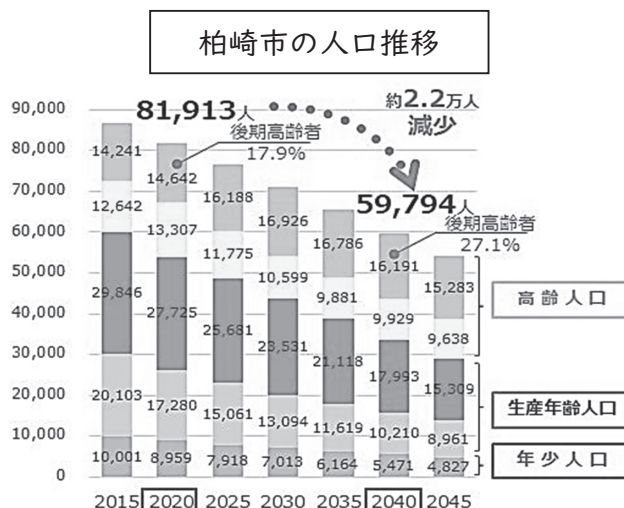
再考する場面を設けることで、生徒は自己の考えを修正・強化したり、ブラッシュアップしたりします。

単元(題材)の様子

ポイント1

地域の課題や地域の持続可能な発展を軸に、「地方自治」の学習をデザインします。単元の導入では、諸資料を通して、「住み続けられるまちづくりを進めるためにはどんなことをすべきか？」を、単元を貫く学習課題として設定します。

地域の課題を扱うことで、学習課題を自分事として捉え、切実感をもって課題の追究・解決に迫ることができます。



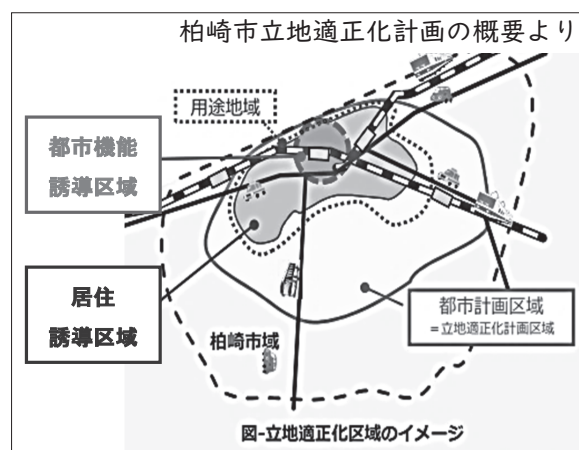
人口減少社会や高齢化が進展する中でも、将来にわたり住み続けられるまちを目指すコンパクトシティについて考えます。コンパクトシティの先進都市・富山市を例にどんな都市政策なのかを学んだ後、地元・柏崎市のコンパクトシティ化の動きに目を向け、未来のふるさとの姿に関心をもちます。

ポイント2

- 都市の持続可能性を高めるコンパクトシティ政策の妥当性について、「効率・公正」の視点から分析を行うとともに、この政策を進めるうえでの課題に焦点をあて、その解決方法を考えます。これにより、コンパクトシティ政策を多面的・多角的に捉えることができるようになります。
- グループ内の意見交換や全体発表を通して、学びの共有を図り思考を広げていきます。

ポイント3

- 学び合いや問いかけ・問い返しなどを通して、どうしたらより多くの人にとって、暮らしやすく住み続けられるまちになるのか、再考し思考を深めていきます。



研究会

ポイント2・3

研究会ではポイント2と3の場面を公開する予定です。コンパクトシティを題材に、持続可能なまちづくりをどう進めていけばよいのか、未来のまちのあり方について考えを深める姿をご覧ください。



社会 <中越地区／長岡市・三島郡中教研>

11月27日(木) 研究会開催

研究主題：公民としての資質・能力の基礎を育成する
学習指導の工夫

～「構造化された問い」と自らの価値や行動を
決定する活動を取り入れた授業実践～

単元名：「2年：日本の近代化と国際社会」
～明治維新と立憲国家への歩み～

会場校：長岡市立栖吉中学校

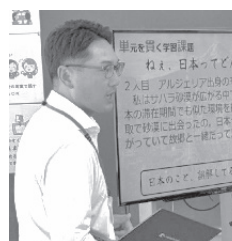
公開：1学級

授業者：笠輪 敬

指導者：長岡市教育センター 指導主事 植木 朋弘 様



研究推進責任者
長岡市立寺泊中学校
金泉 翔



教科・領域担当者
長岡市立栖吉中学校
笠輪 敬

こんな深い学びの姿を目指します

個別の歴史的事象を学んだ上で、その中から自ら課題を発見する力を育みます。さらに、自ら発見した課題を自ら解決する力も育みます。個別の歴史的事象を学ぶ際には、「構造化された問い」を解決していくことで学びを深めます。その学びの深化においては、単元内自由進度学習を取り入れ、個別的、協働的な学びを進めていきます。自ら課題を発見したり、その課題を解決する段階においては、自分の意見と他者の意見を比較し、情報を取捨選択し、多面的・多角的に考察し探究する生徒の姿を目指します。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.1）

学んだ知識を活用して課題や目標を設定する

生徒は単元内で学んだ既存の知識を活用して、新たな課題があることに気づき、その課題解決に向けて思考するようになります。

ポイント2（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.7）

視点の転換や逆思考をして考える

設定の過程で新たな課題を発見し、解決に向かうことができた生徒は、歴史的事象の全てが良い方向に進んだわけではないことに気づき、新たな視点で歴史を見つめるようになります。

ポイント3（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.15）

自分の言葉で学んだことを整理しまとめる

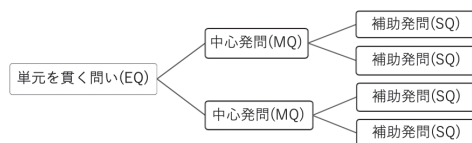
生徒は、本や資料をそのまま要約するのではなく、既存知識を活用して自分なりの言葉や表現を工夫して書いたり話したりすることで、より深い学びにつながります。

単元(題材)の様子

<「問いの構造化」について>

生徒自身が新たな課題意識をもつためには知識(概念的な知識)を身に付けることが必須です。知識や技能を身に付ける段階において「構造化された問い」を生徒が解決していきます。これにより、見通しをもって学習を進めることができるようになり、課題を発見する力につながります。

ポイント1



<生徒による探求について>

新たな課題を発見したり、課題を解決したりする段階において、個人で探求を進めたり、協働的に探究したりします。個人の探求の成果をまとめたり、その成果を共有して協働的に解決したりする際には、ICTを効果的に活用します。

これにより、歴史的な事象を見る視点が広がり、よりよい社会を創ろうとする公民としての資質・能力の基礎が育成されることを期待します。

ポイント2

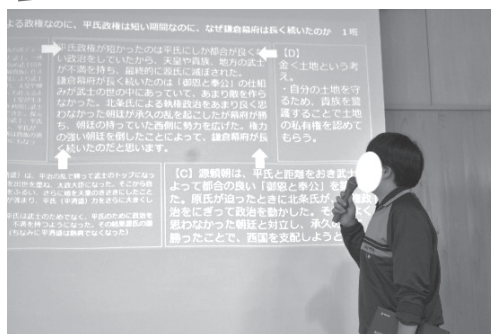


<生徒の「意思決定」「価値判断」について>

上記の2つのポイントを経て、生徒は自らの意思で課題に対する解決策を判断し、表現方法を工夫した上で発表をします。

意思決定をしたり、価値判断をしたりする姿は、公民としての資質・能力の基礎を育む姿であり、これにより、よりよい社会を創ろうとする力が芽生えることを期待します。

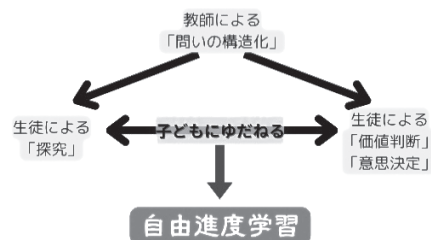
ポイント3



研究会

本研究の実践が、主題である「公民としての資質・能力の基礎の育成」に有効であったかについて協議します。

また、長岡市では「授業イノベーション」を推進しています。キーワードは「子どもが主役になる」です。このことを実現するための手段の1つとして、「単元内自由進度学習」を取り入れ実践しました。研究会では、「子どもが主役になる」ことに関して、本研究が有効であったか、また他にどのような手立てがあるのかについて併せて協議します。



社会 <新潟地区／新潟市中教研>

11月6日(木) 研究会開催

研究主題：社会認識を高め、これからを生き抜く力を獲得する生徒の育成
～学び合いを通して、子どもが自ら 考え、判断し、表現できる授業の在り方～

単 元 名：「3年：地方自治と私たち」

会 場 校：新潟市立新津第五中学校

公 開：1学級

授 業 者：渡辺 美羽

指 導 者：新潟薬科大学 教授 木村 哲郎 様



研究推進責任者
新潟市立葛塚中学校
木村 伸



教科・領域担当者
新潟市立新津第五中学校
渡辺 美羽

こんな深い学びの姿を目指します

生徒一人一人が自己を客観的に捉え（認知し）、他者とかかわり合いながら考えを広げ深める協力的な学習活動や、思考を表現に置き換えたり、多様な手段で説明したりする姿を目指します。単元を通したねらいを設定することで、生徒は見通しをもって授業に取り組み、単元により獲得した知識を用いて多面的・多角的に考察をすることで、将来の住民としてどのような行動が必要かを考えられるようになります。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.2）

住民の願いや思いに基づいて単元を貫く課題を設定する。

これにより、生徒は自分が住む町の魅力や問題点に気づき、単元を貫く課題を自分事として捉え主体的に学習に取り組みます。

ポイント2（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.9・10）

話し合いや学び合いを通して異なる多様な意見を比較して考える。

これにより、生徒は自分の意見をもち、仲間と話し合うことでより深く思考するようになります。

ポイント3（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.19）

理由や根拠を示しながら自分の言葉で学んだことをまとめ、表現する。

これにより、生徒は一住民として自分の考えをもち地域のために将来の行動をとることができます。

単元(題材)について

生徒が「地方自治とは自分が今住む地域で行われており、それが自分たちの生活とつながっている」ということを肌で感じ、住民として「自分の住む地域を自分でよりよくしたい」という思いをもち、「そのためにはこうするべきだ」という意見をもてるように単元を構成していく。単元を貫く課題「新津を再び活性化させるために、私たちができることとは」を地域住民の願いや思いをもとに自分事として捉えさせる。「新津活性化プラン」を作成する中で地方自治における知識を身に付け、さらにその知識を基にプランを練り直していくことで、知識と知識、知識と実際の社会をつなげて考えられるようにする。単元の最後には、自分にもできることがあると気付かせたい。

単元(題材)の様子

新津地区はかつて鉄道の街として新津駅を中心に活性化していました。しかし、現在は活気がなくなりつつあり、生徒はかつての新津を知りません。また新津に住む人々の「新津をより良くしたいという」思いに触れることで、生徒に目的意識をもたせ、自分事として単元を貫く課題に取り組ませていきたいです。(学びに向かう力)

ポイント1



商店街通りに設置されている蒸気機関車の動輪
= 2日、新潟市秋葉区

新津活性化プランをグループで作成します。

授業と活性化プランをリンクさせ、プランを見直しすることにより、地方自治の考え方や仕組みと社会的事象をつなげて考えられるようになります。(知識・理解、思考・判断・表現)。

ポイント2



完成した新津活性化プランを行政や地域住民に提案し、アドバイスを基に秋葉区への要望書を作成します。これにより、自分の意見をもって行動できる住民を育成します。(表現、学びに向かう力)

ポイント3

研究会

3年生の授業を公開します。地域の方を招き、新津活性化プランをよりよくするためのアドバイスをもらい、改善する姿を見てもらう予定です。生徒が新津をより良くするために主体的に考察する姿を見てください。

ポイント1・2・3



商店街のアーケードに七夕の短冊を飾り付ける新潟薬科大の学生たち=6月29日、新潟市秋葉区



社会 <下越地区／五泉市・東蒲原郡中教研>

10月29日(水) 研究会開催

研究主題：資質・能力を育む深い学びにいたる授業の創造
～社会的な見方・考え方を働かせる工夫を通して～

単 元 名：「3年：地方自治と住民の参加」

会 場 校：阿賀町立三川中学校

公 開：1 学級

授 業 者：頭川 玄

指 導 者：下越教育事務所 学校支援第2 課長

阿賀町立三川中学校 校長

白澤 道夫 様

佐藤 雅秀 様



研究推進責任者
五泉市立五泉中学校
高橋 保嗣



教科・領域担当者
阿賀町立三川中学校
頭川 玄

こんな深い学びの姿を目指します

研究推進委員会では、生徒が社会的な見方・考え方を働かせて社会科で育む資質・能力を獲得することを深い学びの姿と捉えました。生徒が見方・考え方を働かせて思考できるように教師が三つの手立て（三本柱）で働きかけます。生徒は、その手立てを基に自己の見方・考え方を広げて思考、判断、表現することで、課題解決力や応用力、社会形成に参加する態度を獲得することを目指します。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.2）

生徒が身近なものや生活と関連付けたり活用したりすることで、「自分事として捉える工夫」をする。

これにより、主体的な学びが促され、社会を作っていくという社会の形成者としての自覚が生まれます。

ポイント2（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.7・8）

生徒が社会的な見方・考え方を働かせる姿を意識して、「深める問い」を設定する。

これにより、共通認識や汎用性、関係性を見いだすことができ、課題を解決する力が身に付きます。

ポイント3（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.9・10）

学び合いの工夫や毎時の適切な問いの設定により「言語活動の充実」を図る。

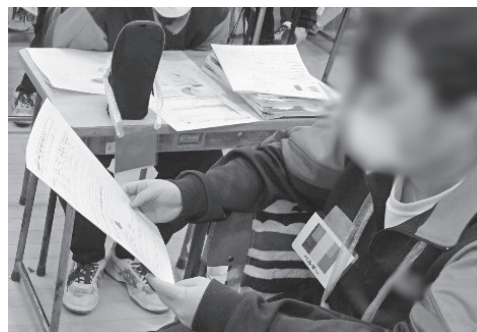
これにより、仲間と共に議論したり、説明や表現したりする場面が生まれ、学んだ知識を活用するようになります。

単元(題材)の様子

社会的事象に対して活発な思考を促すために、生徒の生活に身近な教材を提示し、課題を自分事と捉えさせる工夫をします。本単元では、自分たちが住む町を事例に地方自治について学び、存続可能な町にするために必要な政策を考え、最終的には町に提言するというゴールを目指します。生徒は、さまざまな面と関連付けながら学習を進めていくことで社会的事象と向き合い、教材をより身近に感じ、考え、深めていきます。

これにより、社会参画の意識が芽生え、主体的に課題を解決しようとする力が身に付きます。

ポイント1



生徒各々が担当の国を決めて教材と向き合う
(昨年度の実践より)

生徒同士の対話を深い学びに向かわせるために、見方・考え方を働かせることができる「深める問い」を設定します。対話の場面では積極的に意見交換をするものの、最後は特定の生徒の意見や授業者のまとめで終わりにしないためにも、見方・考え方を働かせた問い＝「深める問い」を投げかけます。

これにより、社会的事象の定義や関係性、課題に対して広く対応できるような性質を見いだすことができ、課題を解決する力が身に付きます。

ポイント2

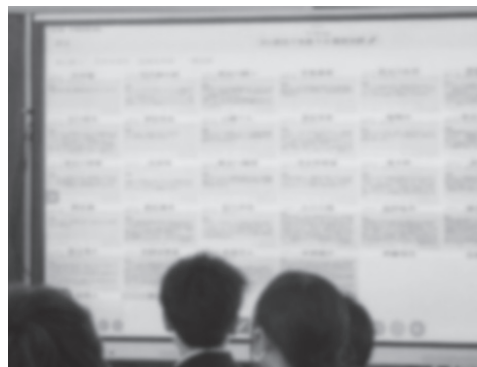


深める問いの設定

生徒が「なぜ?」と感じたり、解決したいと思ったりする問いの設定と対話を促す働きかけにより言語活動の充実を図ります。毎時の問いの解決が事実を捉え、知識の獲得になり、知識を活用する土台ができます。また、学び合いを促すために形態・視点・ツールを工夫します。

これにより、学んだ知識を根拠や論拠にし、学び合いの活性化、さらには相手に考えを分かるように伝える表現力が身に付きます。

ポイント3



学び合いの工夫
(タブレット端末による意見の可視化)

研究会

3年生の公民的分野の「地方自治と住民の参加」で授業を予定しています。

昨今、消滅可能性自治体が公表される中で、自分たちの住む町はどうなるのか。存続可能な町になるにはどんな政策が必要なのかを社会的な見方・考え方を働かせて考える授業を予定しています。

